

1. 古文書の科学
——料紙を複眼的に分析する—— 渋谷綾子・天野真志編著
2. 法隆寺と聖徳太子
——四〇〇年の史実と信仰—— 東野治之著
3. 『仙芥集』翻刻——中世真言僧の受法記録——
(大正大学総合佛教研究所叢書 第37巻) 中世東国仏教研究会編
4. 中田薫
(人物叢書 新装版) 北康宏著
5. 隋——「流星王朝」の光芒——
(中公新書 2769) 平田陽一郎著

渋谷綾子・天野真志編著

『古文書の科学』

——料紙を複眼的に分析する——

文学通信 二〇三・三刊

A5 二四〇頁 一九〇〇円

本書は、最先端の古文書調査およびそのデータ公開に携わる十三人の研究者による十五本の論考・コラムを収めた書籍である。書名の意味は、古文書の料紙^{しやうし}、すなわち古文書の物質としての側面に光を当て、この料紙を複眼(自然・人文科学)的に分析することであり、この異分野連携の意図は本書の構成にも表れており、第2部以外は自然・人文科学双方からの整理・成果によつて構成される。

第1部「古文書料紙への視点」では既往の料紙研究の成果と課題が整理される。1 高島晶彦「古文書研究からの視点」は、古文書学における料紙の研究史を整理し、料紙研究の重要性は一〇〇年以上前に指摘され、不十分なながらも意味のある議論が続いてきたとする。2 天野真志「近世の古文書と料紙研究の可能性」は、注意が向けられ

ることの少ない近世の古文書料紙研究について、分析視角・調査手法の設定から始める必要性を指摘する。3 渋谷綾子「異分野連携からの視点」は、今日の問題を多く取り上げながら料紙研究における近年の異分野連携の動向を整理する。コラム渋谷ほか「料紙研究を語る」は、非破壊で調査し主観ではない形で見せるといふ、本書執筆者も理想とする調査・分析方法が語られた座談会の概要を記す。

第2部「料紙の構造をさぐる」では料紙の製法・産地を明らかにすることに繋がる構成物の分析成果が豊富な図版とともに示される。1 高島「繊維をさぐる」は、主要な料紙の材料である楮・雁皮^{がんび}などの繊維の特徴を解説する。2 渋谷「添加物をさぐる」は、料紙を白くするための添加物や料紙作成時の分散剤などの識別方法を解説する。3 石川隆二「DNAをさぐる」は、非破壊ゆえに料紙解析への利用の限界はあるものの、DNA解析がよりよい補修材料の選定に繋がると指摘する。

第3部「料紙から古文書を読む」では料紙研究を踏まえた史料群に対する研究成果

が記される。1 野村朋弘「松尾大杜所蔵史料を読む」は、近世に古色を付された可能性のある古文書の存在、一度成巻された後さらに古文書が加えられたであろう卷子の存在を指摘する。2 尾上陽介「陽明文庫所蔵史料による料紙研究の可能性」は、近衛信尹が配流先で、都から携帯したであろう不純物を多く含む粗末な料紙を使用した事実を記す。3 渋谷「マイクロスコプで「読む」」は、近衛前久および伊達政宗の発給文書の料紙が単位面積あたりの構成物量において類似性を示すとする。コラム小倉慈司「典籍近世写本の調査から」は、土御門本「延喜式」について、同じ目的に用いられた料紙の時代による差を指摘する。

3 渋谷「世界へひらき、つなぐ」は、世界へ目を向けた時、障害となるのは言語ではなく、情報・成果を公開・提供する方法論であると指摘する。コラム後藤真「紙資料の「データ解析」が持つ変革とコラボレーションの可能性」は、量的研究（自然科学）のためにも質的研究（人文科学）が重要であると説く。

一読して思うのは、記主・発給者単位での料紙調査の重要性である。同一年月日・同一人から発給された古文書を史料群単位ではなく、いかに横断的に調査できるかがカギを握るだろう。また、「古文書が古色を付された」として、それはなぜわかるのか、なぜ古色を付されたのかについても複眼的研究成果の公表を待ちたい。

六月下旬まで京都文化博物館で開催されている展覧会「松尾大杜展 みやこの西の守護神」においても最新の成果が明らかになるように思う。本書を片手に展覧会を回りたい。（佐々木創）

東野治之著

『法隆寺と聖徳太子』

——一四〇〇年の史実と信仰——

岩波書店 二〇三・一一刊

四六 三四六頁 二七〇〇円

東野治之氏は、法隆寺と聖徳太子をめぐる、文献史学に限ることなく、建築史や美術史など広い視点から史実に近づくとをめざして多年研究を積み重ね、ここに一書を刊行された。日本古代史学界の貴重な財産として、喜びにたえない。

第1部「法隆寺の創建・復興とその時代」では、法隆寺が形成された過程やその歴史的価値を明らかにする。法隆寺は七世紀初めに聖徳太子の政治理念を実現するものとして創建されたが、天智九年（六七〇）に焼失し再建される。再建にあたってその性格が大きく変わったとするのが著者の主張で、寺地が変更され、本尊も太子没後に完成された等身の釈迦如来像にかわり、聖徳太子のための寺となり、太子没後九〇年にあたる和銅四年（七一）ごろ完成する。再建は朝廷が主導したと考えられ、天

武天皇が緋帳・帳を寄進したことが「法隆寺資財帳」から知られ、これが天寿国緋帳にあたる。法隆寺は飛鳥時代文化の代表とされるが、実は再建された法隆寺は白鳳時代の寺院である。擬古的な古い様式を採用し太子在世時の再現をめざしたのが、一方壁画などでは完全な唐様式も混在している。法起寺・法輪寺の三重塔で七世紀末に古風な建築様式が採用されるのも同様で、斑鳩を聖德太子の聖蹟として天下に示したとする。

また基礎史料である「法隆寺資財帳」の体例を分析し、寄進者名があがるのは皇族に限られ、最も古いのが天武天皇であることに注目している。法隆寺金堂壁画の文化的意義として、初唐文化で盛んになったインド文化の影響がみられ、七世紀後半の遣唐使中断時期にも唐文化の受容が朝鮮半島を通じて行なわれていたとし、作者として倭画師音櫛・倭画師忍勝をあげる。同じく初唐様式に則った大型多尊塼仏をとりあげ、奈良県二光寺廃寺、三重県夏見廃寺や大阪府百済寺跡の例から、亡命百済人が初唐文化・白鳳文化をもたらしたと指摘する。

第Ⅱ部「聖德太子信仰の展開」では、聖德太子の人物像が展開・流布していった状況を追う。奈良時代の太子信仰として、伝橘夫人念持仏厨子をはじめ、光明皇后と母橘三千代や牟漏女王による太子忌日の寄進が「法隆寺資財帳」にみえ、その背景には太子がその生まれ変わりとされる六朝末の高僧慧思が所持していた法華経を取ってこさせ日本に伝えたという法華経信仰があった。

光明皇后や阿倍内親王の力を借り、僧行信が東院を造営し、天平十一年(七三九)に完成した。東院伽藍は、夢殿が太子を祀る八角円堂、本尊が太子等身の救世観音像であり、その周囲の堂舎を檜皮葺き、掘立柱で建てるなど、斑鳩宮の再現をめざした。東院宝物の細字法華経は、前述の慧思所持とされる経巻で、のちの太子信仰の中枢となるが、奥書によれば六九四年に楊州で書写されたもので、大宝の遣唐使でわたった道慈が舶載したと推定する。また三経義疏も、聖德太子自筆本である可能性は高い。太子の持物や自筆本とされた品が東院に集められ、太子信仰の新たな中心が生まれた

のである。造営を支えた阿倍内親王は、即位後の神護景雲元年(七六七)に東院に行幸したことも指摘する。

太子の墓とされる叡福寺の磯長墓については、太子夫妻と母を合葬したとする三骨一廟伝説は一〇世紀半ばに生まれたものであり、太子と妃膳善岐々美郎女の合葬墓としておくべきだとする。また太子が二歳で東方に向かい合掌し、南無仏と唱えたと掌から仏舍利がこぼれ落ちたという南無仏舍利伝承は、九世紀末頃に成立し、一一世紀に聖たちの活動によって定着し、太子信仰の要素となる。この伝承の背景には法隆寺金堂に安置される舍利があるが、これも養老三年(七一九)に道慈が唐から請求したもので、慧思の舍利信仰をふまえ、太子所持とされたと推測する。以下、「天王寺秘決」「太子伝古今目録抄」の分析、さらに第Ⅲ部「法隆寺研究の周辺」があるが、紙幅の関係もあり省略する。

本書の中枢となっているのは、斑鳩町史編さん委員会編『斑鳩町史』上巻(斑鳩町、二〇二二年)の著者執筆の章節であるが、一書としてまとめられ、読みやすくなった。

著者には「聖德太子」ほんとうの姿を求め
て」(岩波ジュニア新書、二〇一七年)があり、
釈迦三尊像銘や天寿国續帳を読み解き、聖
德太子の政治上にはたした役割を分析し、
聖德太子の実像にせまる優れた著作である
が、本書は法隆寺の歴史に即したこと、
聖德太子がどのように捉えられ信仰された
かが明らかにされ、古代における聖德太子
が長いスパンで明らかになったといえる。
本書で、西院伽藍建立の時点で聖德太子は
偉大な信仰の対象であり、奈良時代に東院
を造営しその宮の再現をめざしたことを読
むと、近年高校教科書で「厩戸王(聖德太
子)」と表記しているが、飛鳥文化の象徴
としては、「聖德太子」を用いてよいので
はと思った。

(大津透)

中世東国仏教研究会編

『仙芥集』翻刻——中世真言僧の

受法記録——

(大正大学総合佛教研究所叢書

第37巻)

ノンブル社 二〇二三・三刊

A5 三六〇頁 六三〇〇円

称名寺所藏・神奈川県立金沢文庫管理の
称名寺聖教は二〇一六年に国宝にも指定さ
れ、いっそう価値が知られるようになった
が、その内容となると、日本中世史学の研
究者にとっても、難解で近寄り難い印象が
持たれている。実際に仏教教理に関わるテ
キストなど、研究対象に取り込むのは容易
でないが、金沢文庫で開催される展示とそ
の図録は、資料の概要を解説し、歴史学か
らの光の照らし方を例示している。加えて、
国文学や仏教学からの研究も導きとなる。
本書もそうした史学に益する一冊で、中世
東国仏教研究会の代表・大八木隆祥氏が長
らく研究に取り組まれている僧定仙に關す
る中核的資料の翻刻である。

定仙(一二三三—一三〇二頃)は鎌倉時代

後期の真言僧で、称名寺聖教の奥書等から、
鎌倉亀谷の新清原寺釈迦堂を拠点とし、鎌
倉に下っていた有力諸師から多くの流派の
伝を授けられたことが知られる。その出自
は不明ながら、文永一年以降の短期間に
伝受しており、伊豆守山の真珠院に正安四
年銘の供養の五輪石塔が残ることからも、
北条得宗家との関係が強く示唆される。

本資料『仙芥集』(一三函一巻)は、定仙
が受法した諸伝のうち、三宝院流・勸修寺
流を中心に集成したもので、定仙自身の記
録・ノートを弟子(おそらく智照)が編集し
たとみられる。現存する全三二帖(うち二
帖は草稿)の翻刻が順次雑誌に発表され、
改めて一冊にまとめられた。解題では、定
仙に關して明らかにされたことを簡潔に提
示し、一帖ごとの概要が解説されている。
修法の作法等の事相に関わる記事が多数
を占め、灌頂や法会の具体的な事柄につい
ての知識や、法流を遡る先師たちの教えや
その人物に關する情報・説話が目に留まる。
断片的で、事実性の高い典拠としては他資
料に劣る事項も多いが、一人の人物へ伝え
られた知識としてのまとまりに意味があり、

鎌倉での仏事の実際も僅かながら知られる。関東に地藏院流を伝えた親玄や、意教上人頼賢(定仙は直接伝受せず)の弟子願行上人憲静・了・上人公然・仏性房義能(名前は伏せられる)、『登山教学大会紀要』五一・二〇〇三年)大八木論文参照)、勸修寺流の大蔵卿阿闍梨増瑜などの伝が含まれる。

翻刻では、原本の行取りを保ち、送り仮名・返点・声点などを採取する。組版はそれほど凝らず、梵字をローマナイズするなど便宜的な表記に止める。とはいえ通常よりも複雑な組版だが、表記の再現には過剰に拘らない。画像公開が進む一方で、組版技術の維持が困難な現状では、一つの方向であろう。編者による説点は打たれず、利用者が読みながら施すのが良い。

紹介子は『大日本史料』第三編の編集(蔵覚卒伝関係史料の収集)で本資料の存在を知り、金沢文庫の図書室で写真帳を閲覧したが、文字の解説からして難しく、項目の区切りや帖の構成、さらに全体像を見通すのは手に余るところであった(良雅卒伝にて地藏院流の根本聖教「台皮鑑」に関する口伝など引載)。世俗に関わる項目もあって、そ

れぞれの関心によって興味深い記事も見いだせよう。図書館・研究室に架蔵され、ふと手に取る機会のあるような資料集の一冊となることが望まれる。

(藤原重雄)

北康宏著

『中田薫』

(人物叢書 新装版)

吉川弘文館 二〇一三・八刊
四六 三六八頁 二四〇〇円

本書は、日本の法制史学を確立した学者として、あるいは大学の自治・学問の自由を守るために奔走した大学人として知られる中田薫の評伝である。著者は古代史を専門とするが、中田の親族への聞き取りや未公開史料の調査を行い、中田の生涯を忠実に復元した。

本書の特徴は、まず、中田の学問形成過程を丹念に描いた点にある。中田の生涯から第三高等中学校・第二高等学校在学時代を扱う第一章は、中田が同級生との交流の中で文芸・文学への関心を育んだことを指摘する。東京帝国大学学生時代を扱う第二

章は、中田が梅謙次郎・宮崎道三郎・戸水寛人の影響を受けており、中田の学問形成はドイツ歴史法学の影響だけで説明することができないと論じる。大学院生時代から助教授時代を扱う第三章は、三浦周行との出会いとその後任として担当した法制史研究室での活動を通じて中田が歴史学者としての能力を磨いたと評価する。主に留学期間を扱う第四章は、中田がベルリン大学でギールケに学んだこと、東京控訴院からの鑑定依頼を受けて入会権の研究に着手したことを指摘する。関東大震災前後を扱う第八章は、大正期から昭和初期にかけての中田の学問の展開を概括する。

また、本書は中田による後進育成についても論じる。大正九年から大正十一年までを扱う第七章では、中田の六人の弟子について紹介されるとともに、論文は簡潔な文章で書く、研究の世界に没頭するという二つの方針の下、中田が厳しくも愛情をもつて弟子を育成していたことが示される。関東大震災前後を扱う第八章は、中田の招聘した宮武外骨による古文書解説指導が中田の弟子養成に役立ったこと、文学部への出

講が坂本太郎・石母田正に影響を与えたことを指摘する。こうした中田の学問形成・後進育成に関する成果は、法制史の研究史を把握する上で重要な知見である。

次に、本書では大学行政における中田の奮闘が描かれる。大正初期を扱う第五章は、澤柳事件に東京帝大法科が関与した背景に中田の活躍があったことを示す。続く第六章は、中田が大学の研究機関化を骨子とする大学制度改革案を有していたことを指摘する。第七章は、初の総長選挙に際して中田が候補者の絞り込みを提案したこと、古在由直総長のブレインとして定年制導入に尽力したことを明らかにする。第八章では、法学部研究室・安田講堂の建設、明治新聞雑誌文庫の設立に中田が重要な役割を果たしている様子が描かれる。法学部長時代を扱う第九章では、中田が法学部長として学内左翼運動に対処する過程が描かれており、左翼学生から非常に恐れられた一方で、学生に対して温かく説諭していたことが示される。瀧川事件から天皇機関説問題までを扱う第十章は、中田が瀧川事件に際しては憤慨する若手教官を抑えようとした一方で、

配属将校増員問題に際しては陸軍省に対して最強硬の立場をとったこと、天皇機関説問題では「国体明徴に関する訓令」の修正を図ったことを指摘する。退官後を扱う第十一章は、中田が退官後も田中耕太郎を通じて大学の内情を把握し、教官たちに大学自治の重要性を説いていたと論じる。近年大学の自治・学問の自由に対する関心が高まっているが、その日本における展開を知る上で本書から学ぶべきことは多い。

さらに、本書には多くのエピソードが盛り込まれており、中田を中心とする様々な人間模様が鮮やかに描かれている。特に、第二章で紹介される「お蝶さん」との熱烈な恋物語や、第五章で取り上げられる法学部若手教官たちとの交友関係は、単なる中田の個人的なエピソードとして興味深いだけでなく、当時の東京帝大の学生・教官が置かれていた環境を示すものとして重要である。本書は「二十年以上の調査」（はじめに）を要した力作であり、中田の人物像を立体的に描いた傑作である。本書が多くの読者に参照されることを願ってやまない。

（安藤克真）

平田陽一郎著

『隋——「流星王朝」の光芒——』

（中公新書 2769）

中央公論新社 二〇一三・九刊

B 40 三三六頁 一〇〇〇円

長い中国の歴史に走った一筋の星光、隋。わずかに二代の治世で幕を閉じた王朝であるが、「日出づる処の天子云々」のエピソードもあって日本では馴染みが深い。本書はそのような隋の四〇年にも満たぬ歴史を、近年の研究成果をふんだんに盛り込みながら、軽妙な筆致で描き出した雄編である。著者には、北朝隋唐王朝の有する「胡族性」と「国際性」を検証した『隋唐帝国形成期における軍事と外交』（汲古書院、二〇一一年）があるが、本書もまたこうした視点を骨子とする。

まず序章と第一章で、隋が華北とモンゴリアの関わり合いから出現したことを述べる。華北の東西相克と、そこに触手を伸ばす突厥という、六世紀後半におけるユーラシア大陸東部の国際情勢を確認した上で、周隋革命がその影響を多分に受けたことを

指摘する。周隋革命については従来、宮中の政争という文脈で語られてきたが、実のところ隋は建国当初より対突厥政策を積極的に展開していたのであり、それがのちに隋唐を「世界帝国」へと押し上げる礎石になったとする。

続く第二章と第三章において、ユーラシア大陸東部における隋の覇権確立を取り上げる。ここでは、異なる生業・文化を有する人々が混在する辺境地帯、フロンティアの生む普遍的な価値観と時代を揺り動かすエネルギーに着目する。まさにこのような地域から台頭した隋は、江南を平定し、北方に雄を唱え、流動的な国際社会の中で練り上げられた普遍性を持つ国家体制を築き上げた。とりわけ文帝は、中華世界の最高権力者である「皇帝」に加え、草原世界の遊牧民に君臨する「可汗」、江南や東南海域を含む国や民族の別を越えて鎮座する「菩薩天子」という三つの顔を持ち合わせていた。これが儒教中心の一元統治を超越し、帝国の多元統治を実現させた、隋の画期性を意味するという指摘は極めて重要である。本書のこの考え方は、各章題に

おいて、江南平定を「南北統一」、江南平定と北方制覇を合わせて「天下統一」と名付けているところにも看取できる。

そして第四章になると、ついに札付きの暴君、煬帝が舞台に上がってくる。しかし、煬帝即位に伴う骨肉の争いは、遊牧社会の遺風を背景として起きたものであり、著者はこの悪名を史料通り受け取ることに警鐘を鳴らす。以降終章に至るまで、煬帝による帝国拡大の大事業と、その失敗が齎した破滅が語られる。煬帝による事業推進の目的や実行力は卓越したものがあつたと再評価する一方で、その性急さと民への負担の強制が自身の命脈を縮めることとなったとする。隋は最終的に高句麗遠征の失敗がとどめとなって終幕を迎えるが、結果としてこれは後世における東アジア世界の激動を呼び起こした。ユーラシア大陸東部に跨る大唐帝国の登場に一役買ったのが、実に暴君とレッテルの貼られた煬帝その人であつたと本書は締めくくる。

以上、極めて粗雑に概観してきたように、本書最大のポイントは、王朝史という枠組みに囚われることなく広範な視野の中で隋

の歴史を再構築したところにある。本書では、「ユーラシア」や「フロンティア」、「多元的」といった晩近の斯界を理解するためのキーワードを随処に見ることができ、これまで隋に関する一般向けの国内書といえれば代表的なものに、宮崎市定『隋の煬帝』（人物往来社、一九六五年）の名著があり、当該書は社会経済史をメインストーリーとしていた当時の歴史学界に対するカウンターでもあつた。唐が煬帝を暴君に仕立て上げたことにせよ、本書を含めた諸書にせよ、歴史は古今を通じて社会と不可分に紡がれるものであると、当然のことながら改めて気がつかされる。ただし、本書が提示する新たな隋の歴史像は、決して社会の潮流に縛られた一つの史観を強要するものでなく、むしろ一面的な視角から解放し、多様な理解が許容される場を提供するものである。多くの人が本書を繙き、洗洋と議論が展開されることを庶幾する。

(三宅舞佐志)